

『我が身にたどる姫君』三位中将論

——「心深き御癖」と密通をめぐつて——

大塚 千聖

〔要旨〕『我が身にたどる姫君』は十三世紀後半成立の全八巻の中世王朝物語である。女三の宮を一途に恋慕していた関白家の貴公子・三位中将は、女三の宮とは密通という形で思いを遂げ、女四の宮と望まない結婚をした。

両親から嘆かれるほどに身辺に女君の影がない三位中将は、密通とは程遠い人物だと言える。何が彼を密通へと駆り立てているのか。本稿は女四の宮との結婚拒否と女三の宮との密通に因果関係があると仮定し、『源氏』『狭衣』との比較を行いつつ、巻一から巻三に描かれる三位中将と女三の宮の物語における独自性を明らかにし、三位中将という人物について考察するものである。三位中将の理性的な振る舞いは「心深き御癖」と呼ばれ、行動を制限し密通成立を阻むものであった。女君に興味がないと思われていたのはこの「癖」ゆえで、女四の宮との縁談が持ち上がり追い詰められた彼は、「癖」に背くことで女三の宮と意思を遂げることに成功した。不本意な結婚は、彼の本心と周囲からの認識の齟齬によってもたらされており、結果的に彼を密通へと駆り立てたと考えられる。

女三の宮と異なった魅力を持つ女四の宮に対し、三位中将は「癖」ゆえに女君たちの間に挟まれて身動きが取れずにいたが、二人の関係を知るにいたった女四の宮の激しい嫉妬が状況を変えた。激しい嫉妬に辟易した三位中将は女三の宮への恋慕を強め、彼女の和歌に背を押される形で再度思いを遂げたのである。

激しい恋慕を抱きながらも「心深き御癖」ゆえに自分からは行動を起こせ

ない「受け身の男君」である三位中将は、水尾中宮、女四の宮、そして女三の宮らの言動に背中を押されながら密通の当事者になり得たと結論付ける。

〔キーワード〕密通・不本意な結婚・心深き御癖・女四の宮の嫉妬・狭衣物語

撰取

はじめに

『我が身にたどる姫君』（以下『我が身』）は十三世紀後半成立の中世王朝物語で、水尾帝の後である水尾中宮と皇后の宮の子どもたちと、関白家の子どもたちを中心とした恋愛譚が、全八巻に渡って描かれる。

巻一から巻三で展開される我が身姫とその血縁の姫君と貴公子たちの恋愛譚には、先行物語の要素が巧みに取り入れられている。この恋愛譚における貴公子側の中心人物が、関白家唯一の男君・三位中将だ。彼は、水尾帝と皇后の宮との間の皇女・女三の宮を一途に恋慕していたが、依然として関係を結べずにいる。身分的に見れば、関白家の三位中将の元

に女三の宮が降嫁することは可能性として十分にあり得るが、彼らは密通という形で結ばれることになった。

女三の宮の異母姉妹である女四の宮との縁談が持ち上がった時、三位中将は必死の抵抗を試みたが、最終的に女四の宮と不本意な結婚をする。既に「意中の人がありながら他の女性との結婚を余儀なくされる男君、しかも相手が皇女ということになると、まず想起されるのは『狭衣物語』であろう」との指摘もあるように、本作品にはふんだんに『狭衣物語』（以下『狭衣』）の要素が散りばめられているが、『狭衣』の枠を取り入れながらも本作品特有の要素が散見されるのだ。

光源氏や狭衣ら先行する王朝物語の男君たちが複数の女君たちとの関係に悩むのに対し、三位中将は両親に「これをさへ嘆き給ふ」と言われるほど身辺に女性の影がなく、一見すると密通とは程遠い人物である。では、何が彼を密通へと駆り立てているのか。本稿ではこの点に着目し、先行物語との比較を行いつつ三位中将と女三の宮の物語の独自性と三位中将の人物像について考察する。

一、三位中将の独自性

先行物語との比較を行うにあたり、始めに三位中将の人物造型について考察したい。長年一人の女君を恋慕する点からは、『源氏物語』（以下『源氏』）夕霧との類似が見いだせる。しかし、両親が意中の相手を知らないという点に鑑みると、雲居雁との関係が周囲に露見していた夕霧というよりは、源氏の宮を恋慕する狭衣に近い造型がなされている。

三位中将は、さまざまげしきばみ聞こゆる人のみ多かれど、さらに思しもよらず、女三の皇女の御さま・かたちをのみ、夢のなか・幻

のつてにも、見ばや聞かばやと、いりもみ給へば、さらにうきたる心なく、せちにすこやかにて、うへはわざとあだめきても見へ給はず、なべての女には心もとどめず、まめやかにけ近きまではならし給ふ人もありがたうてのみすぐし給ふを、大臣・母上は、これをさへ嘆き給ふ。
(巻一、一二頁)

三位中将は女三の宮を一途に恋慕するあまり、女房を含む他の女君には目もくれず、好色めいたふりすらしない。その様子は、息子が女君に興味がないのではないかと彼の両親を嘆き心配させるほどで、彼は生真面目で取っ付きにくい性格をしていると考えられる。

源氏の宮以外の女君から歌を詠みかけられた狭衣がそつなく返歌をしたり、雲居雁と結ばれる以前の夕霧が少女巻で藤典侍と関係を持っていたり、竹河巻で「まめ人」という周囲からの評価を厭った薫がその評価を覆そうとわざと色好み風に振る舞ったりしたことと比べると、一途に一人の女君に恋慕を抱くという点が、三位中将の特徴の一つだといえる。また彼が恋慕を表に出さないことで、息子のことを一切女君に関心がなっていないと思っている両親と三位中将自身との間に齟齬が生じている点も、望まない結婚という今後の展開に関わってくると考えられる。

女三宮に対して一途であろうとする理性的な振る舞いは、「心深き御癖」と呼ばれる。音羽山で女三の宮の同母姉妹・我が身姫を垣間見した際、三位中将は女三の宮に酷似した彼女の美しさに心動かされ、

琴弾く人(我が身姫)は、柱隠れにて、まほにも見えず。こぼれかかる額髪・髪ざしなどぞいひやらむ方なきは、移りやすき心の見なしかと、せめてまもれど、すべて見知らぬ心地ぞする。

(巻一、二四頁)

と女三の宮以外の女君に惹かれたことを、自身の移り気な心のためかと

考えていた。女三の宮付きの女房・中納言の君に口説かれた際には、

「と人には馴らされじとのみ、いといたう心深き御癖は、(中納言の

君にとつて)げにぞあぢきなや。

(巻二、八〇頁)

と心乱されながらも、惑わされまいと理性的に振る舞おうとした。

「癖」は「本性」とは異なった概念で、本来の性格・性質とは区別されて考えられる。癖は「習慣、習癖の意のほか、とくに、良くない性癖、欠点の意で用いられることが多い」く、たとえば光源氏の場合「思うにまかせぬ関係の女君に心ひかれ」ることが彼の癖で、「この癖によってやむにやまれぬ恋にふみ出していくこととな」るのだという。『狭衣』の狭衣にも「癖」の語は使用されており、彼に対しては「後悔するのが、狭衣の性癖」とされる。『源氏』『狭衣』では、男君が女君に対してどのように動くかという点において「癖」が取り沙汰されており、それは『我が身』でも同様であると考えられる。

三位中将は、夕霧や狭衣といった先行物語の男君の要素を断片的に受け継ぎつつも、一途さゆえに周囲からの目に無頓着なところに特徴がある人物と言える。さらに彼の自己認識と周囲からの認識には、非常に大きな齟齬が見られるのだ。

二、「心深き御癖」と密通―『狭衣物語』との比較から―

三位中将の特徴を押しさえたうえで、彼の性質「心深き御癖」が女三の宮との密通においてどのように作用しているかを、『狭衣』との比較という観点から考えたい。上段に『我が身』、下段に『狭衣』の本文を用する。明らかな撰取とわかる部分については、対応する番号と傍線を

付した。

『我が身』(巻二、七七頁)

いみじうしづかなれば、寝殿ざまに歩みおはするに、①宮の護摩にさぶらふ僧都ぞ、うちわななき出ぬる。戸をだにおし立てねば、やがて違ひて入り給へれば、ただこの障子の外にぞ、若き人々の寝たるけはひする。破れたる障子なれば、いとよう見ゆ。②几帳あまた立て重ねたれど、③人御ほどいとしく見えて、帳の前にぞ寄り臥し給へる。あなわびし、いかがせむと引きみれど、いと強う鎖したれば、すずるなる御衣の裾ばかりを慰めに見て立ち明かすも、人や見つけむとをこなれば……

『狭衣』(巻二、一六七―一六八頁)

南の戸口の方に寄りて聞きたまへば、妻戸細う開きて火の影見ゆ。寄りてやをら開くれど、咎むる人なし。火桶置きたり。①夜居の僧のあからさまに出たりと見ゆ。やをら入りて、火をあふぎ消ちたまひて、琴の声するほど近く寄れど……もし見えるべうやあると、柵もあらで障子より通りて、②あまた立て重ねられたる几帳どもにつたひつつ壁代の中に入りたちて見るたまへば、③こなたは宮たちおはしますなるべし、帳の前に二所寄りふしたまへり。

当初から狭衣が熱望したものではなかったものの、『狭衣』ではこの後に女二の宮の元への侵入が成功し、契りを交わした後に彼は初めて女二の宮に対して好意を抱くようになる。そのような状況で、一品の宮との縁談が持ち上がるという筋書きだ。

一方『我が身』では波線部の通り、戸が堅く閉ざされていて侵入することが叶わず、三位中将が女三の宮付きの女房・中納言の君に手引きを

頼む場面が続く。

(中納言の君)「こはかうまで思し召すべきことか。大臣の上に奏せさせ給へかし。さもやすかるべきことかな」と言ふに、「あなわづらはし。おそろしうもとりなし給ふかな。さる大臣の奏し給ふことやはある。まことは、かうのみ放ちすて給ふこそ心憂けれ。今宵さへむなしう帰してむとや」とて……

(巻一、七八頁)

真つ向から手引きを頼んだ三位中将だが、そんなに女三の宮と結ばれたいのなら自分の父親に頼んで水尾帝に奏上してもらえと中納言の君から突き放される。傍線部「今宵さへ」とあることから、過去にもこのような応酬があつたことと、中納言の君は女三の宮の側に付き従い、ずっと男君の侵入を防ぎ続けていたことがわかる。

ただし、中納言の君は以前から

「(女三の宮が降嫁するように)公にも奏すべかなるは、さまでかたはなるにはあらぬなり。そは、などかさしも御身には難き。よし今宵いかにもしなし給へ」と(三位中将は)引き動かすばかりにのたまへれど、「されば、難しとやは聞こえさする。」

わりなしやある数にだにあらぬ身の心に人をまかすべきかは

(中納言の君)

命をもまかせむ人はあはれとも君よりほかに誰か知るべき

(三位中将)

(巻二、七九頁)

と三位中将との関係を望んでいた。人の数にも入らない自分に女三の宮との媒を任せるのかと、一人の女性として扱われることを望む彼女に三位中将は一切取り合おうとしない。先述の通り彼がかたくなに関係を持つとうとしないのは、

すずろなる心ときめきに、心はうち乱れてうち嘆き明かせど、わざと人には馴らされじとのみ、いといたう心深き御癖は、(中納言の君にとつて)げにぞあぢきなや。

(巻二、八〇頁)

と、「心深き御癖」に起因するところが大きい。つまり、密通を阻んでいた要因は彼自身の「御癖」であつたのだ。

この時点では中納言の君と関係を持つとうとしなかつた三位中将だが、ついに

「心憂くもとりなし給ふかな」とて、例のすべり入りぬ。「あな見苦し。人もいかに思ひ侍らむ」といへど、すずろなる道のしるべも、おのづからいかなりけむ、女はありしよりけに思ひ乱るべし。

(巻二、九〇頁)

と彼女とも関係を結んでいる。中納言の君が「女」と呼ばれ、三位中将が彼女に対し生真面目に後朝の文を出していることから、二人の関係が成立したことは確実である。

この結果、三位中将に対して中納言の君は「昨日よりけになびきにけり」と態度を軟化させ、彼を女三の宮の元に導き二人の逢瀬を手引きした。三位中将は「心深き御癖」に背き中納言の君と関係を持つことで、女三の宮とも関係を持つことに成功しているのである。

『狭衣』における密通と女房の関係について、千野裕子氏は

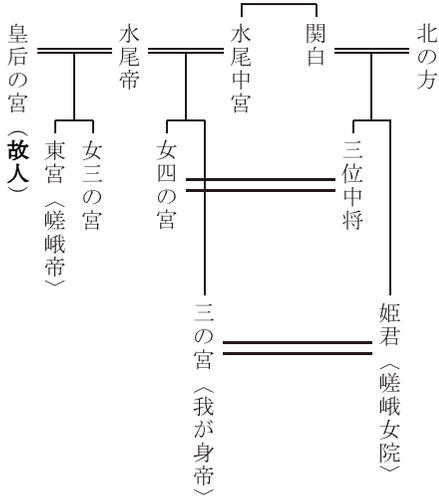
不思議なことに『狭衣物語』において、男君と女君との関係が生じるとき、そこには女房が介在しない。手引きする女房もいなければ、

その場に居合わせる女房も誰一人としていない……一方女房に手引きを求める場合、その試みは必ず失敗に終っている。女二宮の出家後にたびたび取次を求められた中納言典侍や権大納言に一品宮への仲介を求められた中納言の君といった女房たちは、これを頑なに拒

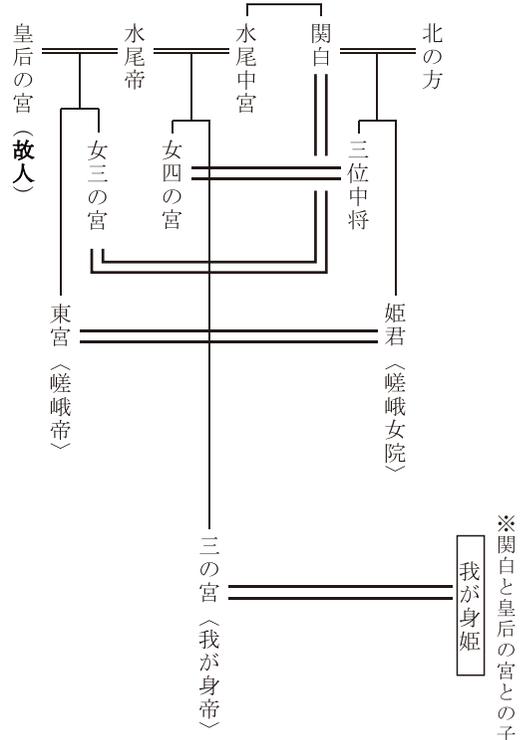
というように、女四の宮のために婿を見繕う水尾中宮が三位中将に白羽の矢を立てる形で、縁談が進んでいく。『我が身』では政治的な思惑が不本意な結婚の成立を後押ししている。

何故三位中将が降嫁先に選ばれたのかと言うと、水尾中宮に「中納言の御ことにおしたちて（女三の宮を）いとようもて消たむ」つまり、皇后の宮方を圧倒したいという政治的な願望があったためである。水尾中宮の理想は【人物関係図B】のように、自分のきょうだいである関白の子・三位中将を自分の娘・女四の宮と結婚させることで、関白家と天皇家・水尾統との繋がりを強固にし、我が子の強力な後ろ盾を確保するものであった。ところが現実には、突如我が身姫が関白の娘として引き取られたことにより、【人物関係図C】のようになった。

【人物関係図B】水尾中宮の理想



【人物関係図C】現実



※関白と皇后の宮との子

父に関白、母に皇后の宮を持つ我が身姫が東宮（嵯峨帝）と結婚してしまうと、同母きょうだい同士の結婚のタブーを犯してしまうため、彼女の嫁ぎ先は一切血縁関係の無い三の宮（我が身帝）以外になく、その事情を知る関白が差配して【人物関係図C】の形に落ち着いた。結果、関白家は水尾統だけでなく嵯峨統とも繋がりをもち、女三の宮が関白の元に降嫁したことで天皇家の勢力は分散することになった。

水尾中宮の要望を受けた関白は、

「（三位中将が）ひとりのみすぐし給ふを、いと思ふやうなり」と
思しよろこぶを……（巻二、八六頁）

と三位中将が女三の宮に激しい恋慕を抱いていることを一切知らずに、独り者の息子に良い縁談が来たと喜んでゐる。一方三位中将は、

さる方（≡女三の宮）を見そめて、えさらぬものに思ふとも（水尾

中宮に)聞かれ奉らましかば、かう押し立ちしも思召し立たざら
ましと、さまざまとりかへさまほしうて…… (巻二、八六頁)

と傍線部のように、行動を起さなかつた過去の自身を悔い、最初から
やり直せたらと考えている。自己認識と周囲からの認識に大きな齟齬が
見られたことが、この不本意な結婚に結びついているのだ。

その後、三位中将の結婚拒否が始まる。三位中将による女四の宮との
結婚拒否の過程に散見される『狭衣』の要素について、先行研究の指摘
を踏まえ、類似・撰取と考えられる箇所を纏めたものが次の【表一】だ。
明らかな撰取とわかる部分については対応する番号と傍線を付した。

【表一】

①婚礼の日が迫り追い詰められている様子

巻・頁	『我が身』	巻・頁	『狭衣』
二・ 九三	①明日といふ日にもなりぬ。さ りとして、②いかやうに隠るへも てなし給ふべきにもあらず、③ なべての世のためものぐるほ しかるべきに、思ひほれて今宵 も明かし給ひつ。	三・ 一〇二	げに、この後いかさまにして逃 るるわざもがたと、多くの願を さへ立てさせたまふ。かかれど、 しるしもなく、①そのほどと聞 く日も近くなりぬ。さりとても、 このことによりて、②山林にな ん入りにけると、言ひ騒がれん ③世の音聞きもの狂ほしう、 人の御為、むげにおと惜しかり ぬべければ、ひたすら思ふまま にもえなりたまはで、まことに 現し心なきやうにぞ思されける。

②意中の女君からの手習いに男君が思いをかき立てられる様子

巻・頁	『我が身』	巻・頁	『狭衣』
二・ 九四	いかなりし代々の契りぞ夢 ながら我が身も我にあらざ なりなば とあるや、④なほ御目とまりけ む、 憂き夢も変はる契りもさま ざまにいか結びし代々の つらさぞ とばかり、⑤同じうへに書きけ がさせ給へるを拾ひて、包みた るを読み続け給ふままに、押し 当ててえ念じ給はず、堪へがた く悩ましきさまにもてなして、 ⑥沈み臥し給へるに……	三・ 一〇〇	④少し御目に留らぬにしもあら で、筆のついでのですさまに、こ の御文の片端に、 夢かとよ見しにも似たるつ らさかな憂きは例もあらじ と思ふに (中略) など、⑤同じ上に書きけがさせ たまひて……かかる破り反故を 見たまひて、せちに継ぎつつ見 続けたまへる心地、げにいま少 し乱れ増さりたまひて、引き被 きて、⑥泣き臥したまへり。

③男君が結婚初夜に妻ではなく意中の女君に文を書く様子

巻・頁	『我が身』	巻・頁	『狭衣』
三・ 一二〇	暗きにいっしか書き急ぎ給ふ は、中納言の君になるべし。 恋ひわぶる命のせめてなが らへてあるにもあらぬ音を もくかな	三・ 一〇六	硯引き寄せて、御文書きたまふ。 今朝の宮へかと思ゆれど、嵯峨 院へなるべし。

『狭衣』撰取が語彙レベルにまで及んでいることが確認できる。金光桂子氏が、

中納言（三位中将を指す、筆者注）―狭衣、女四宮―一品宮、女三宮―女二宮と対応させれば、中納言・女四宮の結婚前後の物語は、狭衣・一品宮の場合と符合するところが非常に大きく、『我が身』が『狭衣』を利用していることはほぼ間違いない。当時の読者もまた、皇女との結婚をしる中納言の姿に、狭衣を重ね合わせて読んだことであろう。

と述べるように、男君の行動の描写という面では本作品は『狭衣』をかなり意識的に撰取しているが、前述の通り不本意な結婚に至る過程は『狭衣』をなぞっているとはいえない。

結婚が差し迫った三位中将は追い詰められ、「心深き御癖」に背いて中納言の君と関係を持つことで、女三の宮とも関係が結ぶことに成功した。中納言の君と関係を持てば女三の宮とも関係が持てるとわかっていたにも関わらず、三位中将はその「癖」ゆえに踏み切ることが出来なかった。彼を一回目の密通に導いた不本意な結婚は、水尾中宮の働きかけによる政治的な思惑と、三位中将の自己認識と周囲からの認識の齟齬とが結びついて起こっているのである。

四、結婚後の三位中将

一品の宮と結婚後の狭衣が、再度女二の宮と関係を持つことなく源氏の宮への恋慕を募らせたのに対し、三位中将は結婚後に女三の宮と二回目の密通をしている。また結婚後、狭衣の心が自分に向いていないことを知った一品の宮は心を閉ざし、夫婦生活は破綻へと向かっていくが、

三位中将は、女三の宮との関係を疑う女四の宮の酷い嫉妬心に悩まされるものの、夫婦の関係は物語終結まで破綻することがない。

このように結婚後の展開は『狭衣』から離れて描かれるが、これまで見てきた「心深き御癖」や認識の齟齬といった要素は、二回目の密通でも同様に機能しているのか。

結婚後の三位中将にとつて女四の宮は、

なべてならず心地よげなるを見る心地して、いささかつれづれならず、見るに思ふこと忘るるさまざまし給へる……（女三の宮のことを）

時の間も忘るるならねど、多くはまぎれ給ひぬるもあはれなり。

（巻三、一一二頁）

と女三の宮への恋慕を紛らわせる存在であった。

意中の女性との逢瀬が叶わない時、別の女性と関係を持つことでその思いを紛らわせることは、『源氏』で雲居雁との仲を隔てられた夕霧が彼女とどことなく似ている藤典侍と関係を持ったことや、光源氏が紫の上のことを藤壺の「晴るけ所」として眺めていたことなどに例を見出せる。しかし、三位中将のように全く異なる性質の女君を見る例は少ない。

女四の宮は「同じゆかりとて、たはぶれにもうちかよひ給へるところもなし」とされるように、同父姉妹ながら女三の宮と似るところが皆無であった。似ていないからこそ三位中将は彼女を女三の宮の形代にして思いを慰めることもできず、また女三の宮への思いを完全に捨てることのできないのではないだろうか。

三位中将は女四の宮を前にすると、

いかばかりの御心ざしにか、あらぬ人の心地して、日暮らし取り籠められて語らひ暮らし給ふぞ、人の御宿世宿世あはれなる。

（巻三、一一〇頁）

と彼女の魅力に絆され、終日別人になったかのように睦言を交わしており、肝心の女三の宮に対しては、

(女四の宮の)あまりけしからぬ御癖は、かならず見つけたらむに、
人(女三の宮)の御ためのいとほしくあはつかなるべきを、せめて思ふゆゑは、文ひとつをだにやすくもえ書き給はず……

(卷三、一一三頁)

と女四の宮の嫉妬で彼女の身に何が起こるかわからないと自制した結果、手紙の一通すら出せなくなっている。このように性質の異なる二人の女君の間で、「心深き御癖」を持つ三位中将はそれぞれの女君に心をかけるようになり、次第に身動きが取れなくなっていく。ここでも三位中将は、自らの「心深き御癖」によって行動を制限しているのである。しかし、この状況に対し

(三位中将が女四の宮に)常にまつはされてのみおはするに、中納言の君さへ、人の心はうたて思はずなるものなりけり、さばかりぞ(三位中将は)のたまひしかど、かうもなりゆきけりと、あはれに思ひ乱るるを…… (卷三、一二三頁)

のように、女三の宮への思いの深さを知っていた中納言の君までもが、三位中将の心変わりを疑うようになった。嫉妬深い女四の宮に「常にまつはれられて」いる彼の様子は、周囲から見れば夫婦円満にしか見えないのである。女四の宮は三位中将と親しい女房の前でのみ嫉妬心を露わにしていたため、夫婦の周囲に現実を知る者は存在せず、またしても実際と周囲からの認識に齟齬が生じている。¹⁰⁾

女四の宮は同父姉妹にも関わらず女三の宮に似るところが皆無で、三位中将は彼女を女三の宮の形代とせず、「癖」ゆえに二人の女君それぞれに心をかけていた。女三の宮に対して何も行動を起こさず終日妻にま

とわりつかれている三位中将の様子は、周囲の人間に対して夫婦仲の良さを印象付けるものでしがなく、実際と周囲からの認識に齟齬が生じることとなったのである。

五、女四の宮の嫉妬と三位中将の密通

『狭衣』には見られない女君の激しい嫉妬は、「心深き御癖」や認識の齟齬とどのように関わり密通成立に影響しているのか。嫉妬深い女四の宮が三位中将と女三の宮との関係を知った場合、女三の宮にどのような被害が及ぶかわからないため、彼の女三の宮への恋慕は秘匿されるべきものであった。ところが、女四の宮は誤解から三位中将と女三の宮の二人の関係を知ることになる。

女四の宮の誤解とは、女三の宮と我が身姫を取り違えたことである。皇后の宮を母に持つ我が身姫は同母姉妹の女三の宮と瓜二つであったため、三位中将は同父きようだいである我が身姫の元を訪れ、彼女を形代として女三の宮への思いを慰めていた。女四の宮は、三位中将が面会していたのが女三の宮であると誤解し、結果的に三位中将と女三の宮との関係を知るにいたった。

女四の宮の誤解は、我が身姫の元から戻った三位中将から

(三位中将は)ただよそながらの御袖のうへ(女三の宮)我が身姫からの移り香)は、思ひ寄るほどならぬにたゆみて、(女四の宮を)例のい
といたうまつはれされ給ふに、ところせき御にほひは、世の常の薫
物・香の香にもあらず、染みかへりたくひなきを、ふととがめて
…… (卷三、一二五頁)

と嗅ぎなれない匂いがしたことに始まる。我が身姫の移り香に気が付い

た女四の宮は、「さばかりとするきに」と、三位中将と女三の宮との間に逢瀬があったことを確信する。

嫉妬心を爆発させる女四の宮の様子は『源氏』夕霧巻と重ねられ、次の女四の宮の言葉①②は雲居雁の①②を連想させるものの、『我が身』では破線部のような強く激しい言葉が見られ、かつその後の展開が『源氏』とは大きく異なっている。

『我が身』(巻三、一三六頁)

「①何ごとのたまふぞ。いひといふことはみな偽りにてありければ、さらにもとましよう心憂くきたなし。ただ今宵いづちもいづちも率ておはして、水にも谷にもうち捨てて、かうわびしき目な見せ給ひぞ。生きても生きたるとも覚えばこそ、宮(水尾中宮)にも見え奉らぬ、かうまがまがしかりける身なれば、②今宵失ひ給へ。」と泣き給ふにいはむ方なし。……ただ死ぬるにても、いたづらになるにてもその隠しつらむところ、いひつらむこと、我に見せよ」と例のもまれこがれ給ふに……

『源氏』(夕霧巻、四七〇頁)

「①何ごと言ふぞ。おいらかに死に給ひね。②まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし、見棄てて死なむはうしろめたし」とのたまふに……

『源氏』では、波線部の言葉を発する雲居雁の愛らしさに、「いとをか

しきさまのみまされば、こまやかに笑ひて」と夕霧が彼女をなだめすかせ事態が収束するが、三位中将は、

(三位中将は)とかくもいふばかりなければ……(女四の宮が)こともなく取りつきて、抓み喰ひなどし給へど、果て果ては痛しかなしともいはず、うち笑ひて臥し給へるに……(巻三、一三七頁)

と、女四の宮に好き放題言わせたり抓らせたりとされるがままで、この場では何も弁解せずに面白がるように笑って臥してしまふ。煮えきれない三位中将の態度に、彼女は不満を激化させ、

(女四の宮)「さば、これ偽りなりとも、さなきとも定かにいふ人あらなむ。堪えがたう苦しきに」とのたまふに……(巻三、一三七頁)と女三の宮と夫の關係が、嘘だとも真実だともはっきり言ってくれる人が欲しいと嘆く。三位中将は

さすがにをかしようなりて、「されば、誰かあることといひしぞ。なごさ苦しき目は見給ふ」とのたまふ……(女四の宮)「いつよりありけるにか、去年よりか、一昨年よりか。さらば、何しにか、ほかへおはせし。さらば来ぞとてそら病ひせし人を、すずろに呼び寄せ、かく人にわびしき目を見させ給ふ宮ぞ、いと心憂くおはします」など、いひ知らずにくきことを顔にさし当ててのたまひ臥したるが、むつかしうわびしけれど、堪へがたう心づきなからぬや、心ざしのあるならむ……「さてあることか、なきことか」と問ひ給ふに、果てはをかしようぞある。(巻三、一三七〜一三八頁)

とこの段階で初めて反論した。傍線部に繰り返し見える「をかし」は、雲居雁の様子を見た夕霧の「いとをかしきさまのみまされば、こまやかに笑ひて」を意識するものと考えられる。夕霧にとつて拗ねる雲居雁の様子は「をかし(愛らしい)」と捉えられるものであったが、三位中将

の場合も同様であると解して良いのだろうか。
 女四の宮に対する三位中将の感情描写の中に、この二人の関係性の変化を見出すことができる（【表二】）。

【表二】 女四の宮に対する三位中将の感情描写

頁数	本文
一一二	なべてならず心地よげなるを見る心地して、いささかつれづれならず、見るに思ふこと忘るさまぞし給へる
一一二	時の間も忘るるならねど、多くはまぎれ給ひぬるもあはれなり
一一二	(女四の宮の嫉妬癖が) 心のうちはあさましうぞ思し悩まるれど、ただうち向かひぬるが、えさし放つまじう、あはれになつかしきに
一一二	(嫉妬した女四の宮が) 泣きこがれまつはれし給ふに、いみじうぞ苦しきや
一一三	(女四の宮の) かうにくき癖を、思はずにむつかしと思ふものから……引き別れ給ひぬれば、たちかへり心にかかわりなく恋しきも
A、女四の宮、三位中将と女三宮との仲を誤解する	
一三六	(女四の宮のことを) いかばかりかは心づきなく愛敬なしなしと思せど、人の御ほど、我が御ほど、荒らかにしたなめて、人に聞かれむに軽々にさま悪しかるべければ……
一三八	(女四の宮がまつわりつのが) むつかしうわびしけれど、堪へがたう心づきながらぬや、心ざしのあるらむ
一三九	日に添へてさま悪しくも生ひなり給ふかなと、うちうめきて出で給へば
一四六	(女四の宮に嘯みつかれて) まめやかにいと堪へがたし。
一四六	(女四の宮にまとわりつかれて) 今宵もいみじううるさし。
B、三位中将、女三の宮と二回目の密通	

Aを境に、女四の宮は日常的に嫉妬心を三位中将におつけるようになり、それに伴って「あはれになつかしきに」「恋しき」といった感情も、「日に添へてさま悪しくも生ひなり給ふかなと、うちうめきて出で給へば」「堪へがたし」「うるさし」といった嫌悪感が強いものへ徐々に変化している。Aの後も、波線部「むつかしうわびしけれど、堪へがたう心づきながらぬや、心ざしのあるならむ」とあるように三位中将は女四の宮を完全に拒否しているわけではないが、見当違いのことで激しく責め立ててくる女四の宮の様子で妻の魅力を再確認したとは断言できないのではないか。女四の宮の嫉妬は、三位中将の女三の宮への恋慕をより強固にするものであったと考えられる。

夕霧は拗ねる雲居雁に対して優位な立場を保っているが、女四の宮は雲居雁のように誤魔化されることがない。三位中将が女四の宮との対話を諦めている印象を受けるのは、彼女の嫉妬が一方的な誤解から生じているためで、表面的にはうまくいっているかのように見えていた夫婦生活は、女四の宮の勘違いと嫉妬よって少しずつ変化していくのだ。

「すずろなる心の乱れもよしなくと思ひ返し給ふ」と、一応は「心深き御癖」に従って行動していた三位中将の背中を押したものが女三の宮の手習いであった。我が身姫宛ての文の中に女三の宮が書いた

大空にただよふ雪の消えかへりふりにしことぞいとどかなしき

(巻三、一四四頁)

という歌は『源氏』手習巻の浮舟詠

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

(巻手習、三五五頁)

を踏まえたものとされる。浮舟詠が匂宮の訪れが途絶えていることを嘆く詠であることを踏まえると、当該歌は三位中将の訪れが途絶えたこと

を女三の宮が嘆く詠と解せる。三位中将が、当該歌で女三の宮の思いを確認し背中を押されたと捉えることも可能だろう。誤解に端を発した女四の宮の嫉妬は三位中将の感情を「まめやかにいと堪へがたし」「いみじうるさし」と変化させ、そのような時に女三の宮の和歌を目にしたことで、三位中将は忘れられずにいた女三の宮への恋慕を強めた。三位中将は、二人の女君に対して誠実であろうとするがゆえにそれぞれの女君の行動に翻弄され、背中を押されるようにして行動を起こしていくのである。

女四の宮の目を誤魔化したい三位中将は、密通後に自身の乳母・伊予を巻き込んで事実を隠そうとする。策は実を結び、女四の宮は初めて彼の言葉を信じて「例のやうにもしづみ給はず、世の常にもてなし給へる」と一切嫉妬しなかった。三位中将はそのような妻の様子を「いとうれしう」と思っており、この密通で二人の関係は破綻していない。三位中将の心が女四の宮から一瞬離れたのも激しい嫉妬に辟易したからで、嫉妬さえなければ結婚当初の良好な関係に戻るであろう。

結婚後も自身の「心深き御癖」に行動を制限されていた三位中将は、女四の宮の嫉妬、女三の宮の和歌といった外的な要因によって密通へと駆り立てられていた。女四の宮にまとりつかれていて三位中将の様子が周囲に夫婦仲の良好さを印象付けていたため、当人たち以外に密通を知る者はいない。また、女四の宮の嫉妬が収まれば二人の仲は修復されるものと考えられる。実際と周囲からの認識に齟齬が生じていた夫婦生活は密通を秘匿する役割を果たしており、誰にも露見することなく物語は彼らの子世代へと繋がるのである。

まとめ

本稿では『我が身』の三位中将と女三の宮の物語における独自性と、そこから見える三位中将像について、『狭衣』との比較を通して考察した。三位中将の特徴は、周囲の目を気にすることなく一途に女三の宮を恋慕する点にあり、彼の「心深き御癖」は密通を阻む要因となっていた。彼の強い恋慕を知らない周囲の人間と、彼自身の自己認識には非常に大きな齟齬があり、これが彼に不本意な結婚をもたらすこととなった。自身の行動を制限してしまう三位中将は、望まない女四の宮との縁談が持ち上がったことで追い詰められ、「心深き御癖」に背いて中納言の君と関係を持ち、女三の宮とも関係を結ぶことに成功した。彼を動かしたのは政治的思惑を背景とした水尾中宮による強引な行動で、不本意な結婚が彼を一回目の密通に導いたと言える。

結婚後、異なった魅力を持つ女四の宮と女三の宮の間で、「心深き御癖」を持つ三位中将は双方へ真摯に思いをかけるようになり、次第に身動きが取れなくなっていく。膠着した状況を動かしたのが女四の宮の誤解による激しい嫉妬で、激しさを増す嫉妬と束縛に辟易した三位中将は、女三の宮の和歌を目にしたことで駆り立てられるように二回目の密通に走るのである。

女四の宮の誤解がなければ状況は膠着したままで、三位中将は行動を起こさなかったかもしれない。三位中将は激しい恋慕を抱きながらも、「心深き御癖」ゆえに自分からは行動を起こせない。いわば「受け身の男君」である彼は、水尾中宮、女四の宮、そして女三の宮らの言動に背中を押されながら密通の当事者になり得たのだ。

『我が身』の本文引用は笠間書院『中世王朝物語全集二〇』に依り、『源氏』『狭衣』の引用は小学館『新編日本古典文学全集』に依った。

注

- (1) 金光桂子「破局を避ける物語―先行物語の利用に見る『我身にたどる姫君』の一特徴―」(『大阪市立大学大学院文学研究科紀要人文研究』五四巻、二〇〇三年三月)
- (2) 『源氏』帚木巻では光源氏について「あだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性」と「まれにはあながちにひき違へ、心づくしなることを御心に思しとごむる癖」というように、本性と癖を区別して語る例が見られる。
- (3) 秋山虔編『王朝語辞典』(東京大学出版、二〇〇〇年)より、高田祐彦「癖」の項参照。
- (4) 巻三、九二頁頭注二〇(新日本古典文学全集)など。
- (5) 千野裕子「女二宮周辺の女房・女官」(『女房たちの王朝物語論』青土社、二〇一七年)
- (6) 今井源衛氏が「我身にたどる姫君の性愛描写について」(『文学』一九八二年、二月)で、女房と男君の会話にみられるユーモアについて指摘しており、本品における面白味の一要素であるとしている。
- (7) 千野裕子『『狭衣物語』と『源氏物語』夕霧巻―一品宮物語を中心に―』(『日本文学』六四九、二〇一五年、九月)で、千野氏は次の通り述べている。
狭衣と一品の宮との結婚に至る展開も、やはり夕霧への意識がうかがえる。狭衣と一品の宮との結婚のきっかけは、一条院を訪れた狭衣が権大納言に姿を見られたことであった。権大納言によって狭衣と一品の宮の間には覚えのない噂を立てられ、やがて結婚は不可避の状況に陥ることになる。濡れ衣によって動かされ、男君と皇女が結婚に至るといふこの物語は、明らかに『源氏物語』夕霧巻と共通性を持っている。
- (8) 注1に同じ。

(9) これは、『狭衣』の女二の宮に相当する女三の宮が ①男物語開始時から一貫して男君から恋慕を抱かれている ②男君にとって容易に結ばれ得ない相手である ③という二点において、源氏の宮の要素も併せ持っていることが作用していると考えられる。

(10) 女四の宮付きの女房たちは「例のこと出で来にけりと思ひて、やをら取り出づ」(巻三・一三七頁)と女四の宮の嫉妬を日常的なものと捉えており、女房たちの噂が世間に実際の夫婦仲を露見させることはないと考えられる。
(文学研究科日本文学専攻 博士課程前期二年)

An Approach to the Character Sanmi Chujo in *Waga mi ni tadoru himegimi*: Regarding His "Deeply Thoughtful Manner" and Illicit Liaison

OTSUKA Chisato

[Abstract] *Waga mi ni tadoru himegimi* [The Princess in Search of Herself] is an eight-volume narrative work of the medieval court period that was completed in the late 13th century. The character Sanmi Chujo was a noble son of the premier's family who was consumed with deep longing for Onna Sannomiya, an imperial princess. He fulfills his longing by means of an illicit liaison with her, then enters an undesired marriage with the princess Onna Yonomiya.

There are so few traces of women in Sanmi Chujo's life that his parents actually lament that lack. Involvement in illicit liaison can therefore be considered very far removed from what one would

expect of such a character, so the question arises of what it is that drives him into the illicit liaison. This paper supposes that the refusal of marriage with Onna Yonomiya and the illicit liaison with Onna Sannomiya are in a cause-and-effect relationship. On that basis, the character Sanni Chujo is considered in the course of an examination that compares this narrative with the *Genji Monogatari* [Tale of Genji] and the *Sagoromo Monogatari* [Tale of Sagoromo] while identifying what is unique in this tale of Sanni Chujo and Onna Sannomiya as told from Volume 1 to Volume 3.

Sanni Chujo displays rational behavior that is described as a “deeply thoughtful manner.” It limits his behavior and impedes his realization of the illicit liaison. It was because of this “manner” that people had thought he was uninterested in ladies. The proposal that he marry Onna Yonomiya then is raised, so that the beleaguered Sanni Chujo acts contrary to his “manner” and therefore succeeds in fulfilling his longing for Onna Sannomiya. The marriage he does not want is visited upon him because of the contradiction between his true feelings and how he is perceived by those around him. It is conceivable, then, that this is ultimately what drives him into the illicit liaison.

Onna Yonomiya possesses an appeal that is different from Onna Sannomiya’s, and it is due to his “manner” that Sanni Chujo finds himself caught between these two noble ladies, unable to move. When she finally finds out about the relationship between the two, it is Onna Yonomiya’s intense jealousy that brings movement into this situation.

Shrinking back from that intense jealousy, Sanni Chujo feels his longing attachment to Onna Sannomiya grow stronger, and her poem acts to push him into yet again fulfilling his longing for her.

Even despite the ardent longing he feels within him, his “deeply thoughtful manner” puts Sanni Chujo in the position of a passive young nobleman who cannot initiate action on his own. The conclusion, therefore, is that in feeling pressured by the words and deeds of the Mizunoo Consort, of Onna Yonomiya, and then of Onna Sannomiya, he becomes able to act as one of the parties in an illicit liaison.

[Key Words] Illicit liaison, unwanted marriage, a “deeply thoughtful manner,” jealousy of Onna Yonomiya, assimilation of *Sagoromo Monogatari*